

創価大学の創立と創価教育

神 立 孝 一

1. はじめに

この数年間、夏季大学講座を担当させていただいております。今年のテーマは「創価大学の創立と創価教育」です。ちょっと難しいかもしれませんが。頭の中を解きほぐしながら考えていきたいと思います。

まず自己紹介します。神立（かんだち）と申します。神が立つと書きます。もともとのルーツをたどりますと、茨城県の土浦の先に神立（かんだつ）という駅がありますが、筑波山麓のふもとに一族がいたようで、いわば山賊の仲間ですね。地名としては、日本に3ヶ所くらいあるようです。昔の原始信仰で、天に近いといいましょうか、神が立つことによってつながっていくというようなことで、筑波山麓と、群馬県の神立高原と、島根の出雲大社付近の3ヶ所に地名として残っています。1955年に文京区に生まれました。来年は還暦で、若い頃は、還暦なんて絶対にこないと思っていましたが、きますね。創価中学の1期生です。中学が開校した年に入学しました。学園の1年目は、私たち中学1年生と高校1年生だけで、2学年のみでした。当時の高校1年生には誰がいたかといいますと、本学の馬場学長や田代理事長、それからアメリカ創価大学の羽吹学長などです。当時の私たちにとっては、唯一の先輩です。中学の2・3年生はいませんでしたから。同級生は、寺西副学長。寺西先生とは、13歳から一緒に、46年間一緒に生活をしてきましたから、親・子・妻よりも長く、従いまして、一緒に居ると自然と学園生だった頃に戻りますね。1983年に創価大学経済学部就職いたしました。1997年、42歳のときに教授になりました。その当時、一番若い教授でした。現在、副学長補という役職を頂いています。創価大学は、学長が1人、副学長が2人、副学長補が4人で、それぞれ業務分担をしています。私は、研究業務担当で、大学院の経済学部研究科の研究科長も兼任しています。専門は、日本経済史です。特に近世村落史が専門で、村の人々の生活を研究しています。従って、全く教育学とは関係ありませんが、本日は、創価教育研究所の所長という立場で、お話させていただきます。

この創価教育研究所は、各種の関係資料の収集保存をしたり、創価大学の歴史をきちんと残すということを目的としています。創価大学は、1971年に開学していますが、何故、創価大学が

創立されたのかという問いに答えるためには、創立者である池田先生のことを研究しなければなりません。そのためには、戸田先生のことを調べるが必要となってきます。また、戸田先生のことを知るためには、創価教育ですから、牧口先生のことを調べるが必要になってきます。池田先生、戸田先生、牧口先生と遡っていきながら、書かれたもの等を収集保存することが必要となってきます。そのために、2000年11月16日に、創価教育研究所の前身である創価教育研究センターが開設されました。戸田先生が、池田先生に創価大学の設立構想を語られたのが、1950年の11月16日ですので、因みにこのことは、池田先生の『若き日の日記』の中に書かれていますが、それからちょうど50年後に、創価教育研究センターが開設されたというわけです。その後、活動していく中で、『牧口常三郎全集』（東西哲学書院、第三文明社）に載っていない新たな資料が次々と出てまいりました。そこで、創価教育研究センターを発展拡大したほうが良いということになりまして、2006年4月2日に創価教育研究所になりまして、現在に至っています。皆様は、『第三文明』という雑誌をご存知だと思います。この中に「創価教育の源流」というテーマで、毎月掲載されているものは、創価教育研究所が全面的に資料等で応援し、牧口先生、戸田先生に関して、今の時点で、間違っている点、分からない点、分かっている点を明確にするという作業を行っています。この連載が一段落しましたら、また違った研究の地平線が見えてくるのではないかと思います。今日は、これらの研究成果に基づいて、創価教育のことと創価大学のことをお話させていただきたいと思います。

教育というと、唯一誰かが語れるテーマです。何故かというと、皆様に共通したテーマだからです。南イリノイ大学カーボンデール校の哲学教授で、デューイ研究センター所長のラリー・ヒックマン教授は、教育の研究をしている人は、一番しんどいと言っています。それは、自分が習った時の先生と比べて、子供が習っている先生に対して、これは違う、と文句が言える。言いたくなりますね。これは、教育に携わる人にとっては、面倒なことになるわけです。私の専門は経済史です。経済史の話をして、あまり文句はつけられないですね。しかし、教育については、違う。本来の教育はこうなのではないか、と言えますね。そういう状況の中で、われわれが標榜している創価教育とは何なのか、ということを考える必要があると思います。本日は、そのきっかけをつかめたらと思います。

まず、問題提起をします。1つは、創価教育とは何なのかということ。これについては、すぐに結論は出ません。大学は、すぐに結論を出すところではなく、問題を出して考えるところです。簡単に結論が出るような問題ならば、それについて大学で研究する必要は無いということになります。

2つ目は、創価大学が設立されたことの意義、これを考えてみたいと思います。

3つ目は、創価大学で実践されている創価教育とはどういうものなのか、具体的にどういう形で実践されているのかということ。

以上3つのことを、今日は考えていきたいと思います。

2. 創価教育と『創価教育学体系梗概』

1つ目の創価教育とは何か。牧口先生の創価教育について、本格的に研究をしようと思うと、当然、まず『創価教育学体系』を読まなければなりません。しかし、読んでいくと、いかに牧口先生が広い視野から教育のことを考えられたのか、ということがよく分かって、私自身もそうですが、よく理解できないところも出てきます。実は、牧口先生も、そのことは良く分かっていらして、そういう人たちに対して、『創価教育学体系梗概』というものを書かれています。これは『牧口常三郎全集』第8巻（第三文明社）に全文掲載されていますが、まず入り口の第1歩として、この『創価教育学体系梗概』をつかひながら、創価教育とは何かを考えてみたいと思います。

午後は、『人間教育への新しき潮流』（第三文明社）という本。これは、創立者とジム・ガリソン、ラリー・ヒックマン両先生方との対談です。この本には、ジョン・デューイと牧口先生の共通している点などが述べられていまして、そこで創価教育の本質というものが描かれています。この本を通して、説明をしていきたいと思います。その上で、今の創価大学は何をしようとしているのか、何を一番大事にしているのかという話をしたいと思います。

ここで、簡単に牧口先生の人生に触れておきたいと思います。牧口先生は、1871年、明治4年6月6日に生まれました。創価大学の開学が1971年ですので、奇しくも牧口先生生誕100年目の開学ということになります。

創価大学は当初の計画では、1973年開学の予定でした。それを2年前倒して1971年に開学いたしました。それには、色々な事情がありますが、創価高校の1期生が、昭和43年、1968年に創価高校に入学し、卒業するのが、まさに1971年だったということです。この開学の年、1971年には、文系A棟の後ろの部分、北側の部分は、まだ出来ていませんでした。したがって、2期生が入学したときは教室が足りなくて、ありとあらゆる所を使って授業が行われたと聞いています。3年目になって全てが完成したということです。

牧口先生の誕生日である6月6日というのは旧暦でして、新暦では7月23日になります。しかし、現状は、旧暦の6月6日です。通っていますので、そのまま6月6日ということになっています。新潟県柏崎の荒浜村というところで生まれました。1893年、明治26年、北海道尋常師範学校を卒業。卒業してすぐに、北海道尋常師範学校附属小学校の訓導となり、教鞭をとられました。しばらく訓導を続けていたのですが、1903年、明治36年10月15日、32歳のときに『人生地理学』を発刊します。この数年前に、北海道尋常師範学校附属小学校の教師を辞めて、地理学の専門書を出すということで、東京に出てこられました。その後、色々な経緯がありますが、1913年、大正2年4月、東盛（とうせい）尋常小学校の校長になります。戸田先生が、1920年にここを訪問されています。この訪問については、今後いろいろ分かってくることもあるかと思います。1928年、昭和3年に日蓮仏法、法華経の信仰に入られました。1930年、昭和5年に『創価

教育学体系』第1巻を発刊。それが創価教育学会の創立となり、教職を離れたのが1932年、昭和7年。創価大学・創価教育の構想というものを発表されたのが、1939年、昭和14年です。ですから、教職を離れて、創価教育というものは一体何なのかということをも更に研究して、その理論を踏まえて創価大学を作りたいということです。そこで確認しておきたいことがあります。牧口先生は創価教育の理論というものを考えていたときに、法華經に出会います。順番は、まず創価教育の理論が先にあって、その理論を考えている時に法華經に出会い、それによって理論が固まっていったといいましょうか、法華經に出会うことによって、手直しをしながら固めていったといいましょうか、その時はまだ、現役の校長先生だったので、教育の現場で、子供たちに教える様々なことも考えながら、『創価教育学体系』の理論というものが出来上がっていきました。その後、教職を離れてからも、創価教育の理論を考え続けていき、今度は、その理論を実践に移したいということになります。牧口先生のやり方というのは、現実の社会があって、そこで出てくる様々な問題を踏まえたうえで理論を作る。帰納的といいますか、ひとつひとつの経験を積み上げて理論を作り上げ、それが完成したら、次は実践に移す。その実践の場として、創価大学、創価高校、創価中学を作り、そこで自分の理論を実践したいということです。

本日皆さんと読み解こうとしている『創価教育学体系梗概』は、1935年、昭和10年の春頃に公表されたものです。活版印刷のパンフレットのようなもので、販売されたというよりも、配布されたものらしいです。詳しいことは分かりませんが、配布の対象は、当時の青年教師たちです。『牧口常三郎全集』第8巻385頁には、「当時の教育界の閉塞状況に苦悩する良心的青年教師たち」に配られたとあります。当時の心ある先生たちは悩んでいた。この悩みというのは、恐らく今も変わらないものなのではないかと推察できます。

教育学は、学問として成立しています。また、いろいろな学者が、ああだ、こうだと言っていますが、現場にいる先生たちは、いつの時代も同じようなことで悩んできました。その悩みを解決する方法は無いのか、より良い教育がどこから出てこないのか、ということは、現代の先生方も思っています。私の研究室は、経済史という歴史の分野を学んでいるので、教師になった卒業生もかなりいます。東京都の中学校で校長をしている教え子もいますが、やはり悩みは一緒です。子供達が、どうしたらきちんと勉強するようになるのか。どうしたら荒れないですむのか。荒れるというのは、いじめをやる子もいれば、やんちゃをする子もいれば、警察沙汰になる生徒もいます。そういう問題は、どこにでもあるものですから、この地域だけは無い、ということはありません。牧口先生は、そうやって当時の悩んでいる先生たちに、『創価教育学体系』を読んでもらいたいということから、簡単な概説、全体を理解するための道筋に導こうとしてこの『創価教育学体系梗概』を作られたのではないのでしょうか。

『創価教育学体系梗概』の目次の構成を見ると、緒言として「教育の合理化を論ず（著者の辞）」とあります。その後、「創価教育学の五大主張」、そして『創価教育学体系』各巻の説明（第1巻「教育学組織論」、「教育目的論」、第2巻「教育の原理としての価値論」、第3巻「教育

の政策的方法論」、第4巻「教育の技術的方法論」、第5巻「学習指導即教導論」、「結語」があり、「創価教育学各論」となって、道德教育・綴方教導・読方教導・書方教導・地理教授・郷土科・算術教導・理科教導・歴史科教導の各科目の研究が続き、最後に「結語 法華経と創価教育（著者の辞）」となり、「創価教育学会要覧」がつけられています。

『創価教育学体系梗概』は、『創価教育学体系』の各巻の概説を示してくれています。そこでとりあげられた項目をあげてみましょう。まず、『創価教育学体系』第1巻の「教育学組織論」「教育目的論」ですが、学校も組織ですね。社会の中で一番小さな組織は家庭で、最大の組織は、国家です。学校は、その中間に当たります。また、クラスも組織です。学年も組織だということですね。そして次に、もっと大事なのは教育の目的です。教育は何のためにあるのか。何のためというのは素晴らしい言葉です。開学当時の創価高校の寮歌に「〇〇目指すは何のため」とありますが、それをご覧になられた創立者が、いい歌だなと言われて、それが後に校歌になりました。余談ですが、作詞者の小倉裕兄さんは、他大学で教員をされた後、現在は、本学の教員として、文章の表現法に関する講義を担当されています。

『創価教育学体系』第2巻の「教育の原理としての価値論」は、根幹にあたるどころの教育哲学としての価値論になります。つまり、『創価教育学体系』第1巻と第2巻で、創価教育の中核的なことを説明されています。目的と考え方ですね。

『創価教育学体系』第3巻「教育の政策的方法論」、第4巻「教育の技術的方法論」、第5巻「学習指導即教導論」と続きます。これは、教育の具体的なやり方、考え方となります。そして結論となります。

その後に、「創価教育学各論」として、教科ごとに研究されていますが、これは量としては少ないです。それは、各教員の専門に従って、読んでくださいということだと思います。最後に「結語 法華経と創価教育（著者の辞）」となりまして、これは非常に重要なテーマです。あとは、「創価教育学会要覧」があります。以上が、『創価教育学体系梗概』の骨組みです。専門書を読む時は、必ず、目次を読みきりなさいといわれますが、目次を読んで、何が書いてあるか分からない本は、読む必要が無いとまでいわれるほどに、目次は重要です。

『創価教育学体系梗概』の最初に書かれている「緒言」は、牧口自身が書きました。その後の文章は、当時の創価教育学会の編集部が、牧口の書いたものをまとめたものです。そして「結語」は、牧口の自筆です。「創価教育学会要覧」は編集部が書いたものです。全体として、こういう構成になっていますので、『創価教育学体系』を学ぶ入門書として大事な本ではありますが、牧口研究をするものにとっては、特に自筆の部分が重要ですね。つまり、「緒言」と「結語」です。『創価教育学体系』に書かれた問題提起を、この梗概では、簡単にまとめてありますね。昔の文章なので、ちょっと難しいですが。

牧口先生が書かれた「緒言」には次のようにあります。

「すべての産業が合理的の経営でなければ、今の生存競争場裡には、立って行けない時勢になったのに鑑み、日本の教育が何の方面に於いても暗中模索の盲動に沈滞し、極めて低級の能率に甘んじてゐるのを改め、一定の軌道に乗って、確実に経済に所定の目的に到達し得るやうに、建て直さなければ、国家の前途は寒心すべきものだといふのが本教育学説の論旨である」(『牧口常三郎全集』第8巻、第3文明社、1984年、385頁。以下『全集』と略記する)

ちょっと難しいですが、当時、いろいろな産業が起きてきました。この『創価教育学体系梗概』が書かれたのが、1935年、昭和10年です。日本の産業革命は、大正の末期から昭和の初期にかけて起きたわけですが、特に20世紀になってからの進歩が早くて、いろいろな技術革新がありました。当時の最大の輸出産業は、綿、造船で、リーディングセクターとして、日本を牽引していました。それにあわせて、日本の企業が、合理的に無駄を排して利益を上げていこう、経済的合理性にのっとって経営していこうとしているときに、教育についてはそうっていない。あまりに低級の能率に甘んじている。これを、合理的に無駄なくやれるようにしなければ、国家の前途は無いという問題意識があり、教育の分野だけが遅れているので、それを何とかしたいというのが、牧口先生の根本にありました。

「速^{すみやか}に盲目的な暗中模索の自然的教育法を脱却し、明目的なる合理的教育法によって、学習労力の経済と教授能力の経済とを図り、従って時間も費用も大いに節約を謀り、そしてもっともっと能率を高め、以って確実に教育の目的を達する様に工夫改良をなすこと、恰も他のすべての産業が些の油断もなく、改良進歩の工夫をなして今日に至った如くすることである」(『全集』387頁)

教育以外の産業は、無駄なく改良されて、より良いものにしようじゃないかといって、やっているのに、何故教育はそれが出来ていないのか。これは昔ながらのやり方でやっているから、こういう事になるのだから、よく考えようということですね。

「遺憾なことには、そのたよりとする教育学なるものが、実際の生活に殆ど没交渉なる哲学的なるために、不経済と知りつゝも、諸々の迂遠なる修養法を探らねばならぬことであらう」(『全集』388頁)

本当は、教育なのだから、教育学に基づいてやれば、効率が良くて、教えるほうも良くなるはずです。その教育学は、教育哲学によって支えられているはずなのに、その教育哲学が、実際の生活からかけ離れて、人間の生活、人間というもののとの接触が全く無く、机上の空論となってしまう。牧口先生が、実際に教育現場に立って、失敗したことや上手くいったことなどをまとめて理論にしたものが創価教育学です。例えば、白金小学校時代に、関東大震災があって、その際に、ボランティアに行ったり、物資を送ったりされた。そういう具体的な実践の中から色々と考えられたということです。牧口先生のご家族に伺うと、儉約家で、新聞に入っている広告の裏に原稿を書かれたりされていたようで、そうやって何枚も書き溜められたものを、まとめられたということでしょう。つまり、帰納というのは、初めからストーンと悟ったということではなく、

実践のなかで、現場で積み上げていったものだということですね。それが創価教育学だということです。ここは重要なところです。ここで述べられていることが問題提起です。

次に「創価教育学の五大主張」には、次のように書かれています。

「創価教育とは、全く新しい名称であるが、何を意味するか。実際に役立つ生活即ち価値創造を指導するといふことに外ならぬ」(『全集』390頁)

これが、創価教育である。これは、牧口先生の定義付けです。実際に役立つための価値創造、生活の中に価値を創造していく。言葉としては分かります。具体的にどうなのかということになると、非常に難しいです。具体的に価値創造とは何なのか。創価大学では、「創造的人間たれ」といっていますが、これは、価値創造からきています。「創価教育学の五大主張」、1. 詰込教育の排撃と代案の提供、2. 画一主義の排撃と教育法則の確立、3. 知育偏重排撃と真教育の確立、4. 徳育法の計画的確立、5. 無方針の自然教育排撃と計画的教育法の提唱。これらは、このまま今の教育現場に当てはまりますね。牧口先生が悩んで闘ってきた創価教育の内容が、まだまだ現実に生かされていないということが分かります。教育を変えるということが、如何に大変なことか。人間が人間を教えるわけですが、教え方をどうしたらいいのかというのは、我々のテーマでもあります。

それから、現状の教育学への批判ということで、次のように書かれています。

「教師相手の教育学は昔から師範学校にも大学にも教科としては儼存^{げんそん}して居ながら、教壇の実際生活には一向没交渉でも何等の抗議も起らず、今日の無価値な講義を形式的に繰り返して居る」(『全集』391頁)

いろいろな大学の教育学部で教育学を講義していますが、実際に教壇で教師がどうやっているのかということです。教師が教育学を活用して教えているのかどうか。教師の側からも、こういう教え方は価値が無いですよというような反論が起こっていない。私自身も耳が痛いですね。現状の大学の講義は、つまらない。教師が一方向的に話をするだけです。現在、FD活動で教育の質の向上を目指す動きも出てきましたが、牧口先生の教育論は、一貫して教育の根本的なことを問いかけているような気がします。

「従来の哲学的教育学とは着眼を一転し、一般自然科学の方法に準じ、教育実際の経験的事実から帰納して根本的原理に到達せんとしたのである」(『全集』392頁)

様々な具体的事例から見て、教育の根本原理とは一体何であろうか、というところに、自分と

してはたどりついたというのが、牧口先生の言わんとしているところです。一番重要な点で、教育の目的とは何か。それは、「人間生活の目的を教育の目的とするより外に途がないことは固よりであろう」（『全集』393頁）とあって、人間の生活の目的、人間が生活をする中で目指すもの、それが教育の目的である、ということですね。私たちは何を目的に生きているのか。人間が持って生まれてきた目的とは何か。「幸福の二字を以てこれを提出したら何人がこれに異議を挟むものがあるであろうかといふのが本篇の眼目である」（『全集』391-4頁）。何のために皆さんは生きているのですかと聞いて、それは、幸福になりたいからだ、幸福を目指しているのだ、と答えられたら、それは違うよとは言えないでしょう。いろいろやりたいことがあるだろうけれども、究極何が目的かと言えば、幸福になりたいのだと。この幸福観の中身は、人それぞれですね。教育の目的とする幸福の内容を考えなければなりません。幸福はいろいろあるけれども、本来の幸福とは一体何なのか。それは、要するに価値の創造を獲得する以外ない。教育が意図している人間の幸福とは何かといえ、それは価値創造なのだ。価値を創造する人生、価値を創造する生活、それが最も重要なのだといっています。

3. 「法華経と創価教育」

牧口先生の教育の理論が、どのように成り立っていったのかは、「結語 法華経と創価教育（著者の辞）」に出てきます。結論は、最初に書いてあります。整理しますと、教育の目的とするものは、価値創造の獲得以外にないので、その価値創造の獲得は、どうすればできるのか。教えられた生徒たちが、価値の創造を獲得するために、教師は何ができるのか。そこで、牧口先生は、結論として「結語 法華経と創価教育（著者の辞）」に、価値の創造を獲得するためには何が必要なのか、教師側から考えてみようといわれています。

「創価教育学体系の研究が次第に熟し、将に第一巻も発表せんとした頃、不思議の因縁から法華経の研究に志し、そして進み行く間に余が宗教観に一大変革を来した。もとは禅宗の家に生れ、法華の家に養はれたのであったが、何等信仰の念はなかった。苦学力行の青年期に敬愛し親近した師友は、大概基督教徒であったが、遂に入信の程度には至らなかった。壮年上京以後儒教の道德だけでは不安に堪へずして、再び禅に参じ、基督教に聴き、深呼吸法をも習ひ、其他の教説にも近づき多少の入信はしたが、遂に深入するには至らなかった。が古神道に基づく禊会には十数年間、夏冬の何れかに大概参加し、お蔭で今もなほ毎朝の冷水浴は欠さないほどに至ってゐる。が心から信仰に入ることは出来なかった。何れも科学及び哲学の趣味を転ぜしめ、又はそれと調和するほどの力あるものと感ずる能はなかったからである。ところが法華経に逢い奉るに至っては、吾々の日常生活の基礎をなす科学、哲学の原理にして何等の矛盾がないこと、今まで教はった宗教道德とは全く異なるに驚き、心が動き初めた矢先き、生活上に不思議なる現象が数種現はれ、それが悉く法華経の文証に合致してゐるのには驚嘆の外なかった」（『全集』405頁）

牧口先生は、渡辺という家に生まれて、そこが禅宗だった。お父さんが北海道に行ったまま帰ってこなかったんで、お母さんは実家に戻って、離婚ということになったわけですが、牧口先生は、お父さんの妹さんの嫁ぎ先である牧口家に養子に入り、その牧口家が法華の家だったという

ことです。その後、三谷素啓に出会って『立正安国論』を知り、自分なりに法華經を読み、当然、明治時代の方ですので、法華經を白文で読めるわけですね。それで28品読まれたのでしょうか。それが全部自分の身の回りでおきたことに合致する。他の宗教とは全然違うと思われた。三谷素啓とはその後、袂を分かちましたが、同じ日蓮の研究者でもちょっと違うのですね。

「そこで一大決心を以て愈々信仰に入って見ると、『天晴れぬれば地明かなり、法華を知るものは世法を得べき乎』との日蓮大聖人の仰が、私の生活中になる程と肯かれることゝなり、言語に絶する歡喜を以て殆ど六十年の生活法を一新するに至った」(『全集』406頁)

牧口先生は、57歳のときに法華に帰依しています。新しいものに一大歡喜を味わうという、若々しい発想、生き様が見て取れます。

「暗中摸索の不安が一掃され、生来の引込思案がなくなり、生活目的が愈々遠大となり、畏れることが少くなり、国家教育の改造を一日も早く行はせなければならぬといふやうな大胆なる念願を禁ずる能はざるに至った」(『全集』406頁)

それまでは、国家教育の改造などとは考えていなかったが、法華經に出会ったことによって、法華經を読むことによって、これではだめなのだと、遠大な目的を自分の中で持つようになり、さらに国家の教育まで、これではだめだと思えるような問題意識を、法華經に出会って自分が変わったことによって持つようになったということですね。

「蓋し、『彼れが為に悪を除くは彼れが親なり』てふ最大の慈悲を、最高の正直によって生活する法華經の精神に違ふならば、『諸天善神は昼夜に常に法の為の故に之を衛護し給ふ』との經文が聊かながらも、研究と体験とによって証明されたやうであるからである」(『全集』406頁)

つまり、本当に自分の目的を果たそうとして努力しているのであれば、必ず諸天善神が守ることが書いてあるので、すごく自信がついたし、自分の思うとおりにやればいいのだと考えるようになったということです。

「創価教育学の研究にもこれから大なる信念を得て一大飛躍することゝなり、遂に斯様な大胆な表現を敢えてするに至ったのである」(『全集』406頁)

これは「結語」の一というところです。前文です。これを読むと、牧口先生の状況が見て取れますね。

「仏教各宗がいかに釈尊を尊崇し奉らうとも、その経文が現代の吾々の実際生活に当てはまらなければ、お伽噺のやうなもので無用であらう。それが日蓮大聖人の出現によって地上に関係づけられ、しかもその御一生の法難などによって、一々因果の法則が証明されたとしたらば、理想だけの法華経が吾々の生活に現実にしたことではないか」（『全集』407-8頁）

牧口先生は、大聖人の役割について、法華経に説いているものを、実際の生活の中で具体的な人間と結びつけてくれたのだ、という読みとり方をしています。同じように、教育学という学問が、机上の論理だという意見がありますが、教師が具体的にやってみて、どういう失敗をしたのかを実際に示せば、それは教育学という学問が、現実の生活の中で具体的にになるし、みんなの役に立つものになるではないか、というのが牧口先生の考えで、それが教育学という学問の体系を確立するという運動から、宗教革命運動に展開していく1つの考え方につながっていくと思います。牧口先生が、昭和7年に教職を離れて以降、それまでは、青年教師を対象にしていたものが、法華経の話になると一般大衆へとその対象を広げていきます。まさに、昭和10年代頃から創価教育学会は、現実には教育だけの学会ではなく、いわゆる宗教運動体として、スタートしていったということです。

「創価教育学の説明せんとする教育法との関係は如何」

「要するに創価教育学の思想体系の根底が、法華経の肝心にあると断言し得るに至った事は余の無上幸栄とする所で、従って日本のみならず世界に向ってその法によらざれば真の教育改良は不可能であると断言して憚らぬと確信するに至ったのである。勿論最初から経文を演繹したのではない」（『全集』410-11頁）

最初から経文にあることを当てはめようとしたわけではなく、自分が実際の生活の中で、経験したことの1つひとつを積み上げていき、それが法華経に書かれていることと同じだと確信したといわれています。創価教育学の思想体系は、いったい何かといえば、法華経である。法華経によって現実を何とかしなければいけないとなった。それを自分が体験し、経験する中で、法華経に書いてあることと全部合致しているということがわかってきた。だから、初めから経文があって、経文通りにやればいいという話ではないということです。経文が如何に正しいかを、自らの行動によって証明するのだということです。経文を信じて行動した人間が、経文どおりにならなかったら経文は嘘になる、ということです。だから何が大事かといえば、人間なのです。その点からいえば、釈尊、あるいは日蓮大聖人が、本当に正しい仏教を伝えた人なのだとすることを証明するのは、今生きている私たちということです。

「教育上に於ける『信の確立』に就て、痛切に多くの言ふべきものがあるが」（『全集』412頁）

「学習指導乃至生活指導を独特使命とする教育に於て、信の確立が何よりも先決問題であることは言ふまでもあるまい」（413頁）

「信の確立が宗教上よりも、より近く教育上の先決問題であるとして、被教育者に之を指導するを首肯するならば、先づ以て教育者自身に関して信の確立があるか否かを反省しなければならぬではない

か」(414頁)

つまり、先生のことを信用しろと学生や生徒たちに言ったとする。しかし、教師自身は何を信じているのか。教師自身が、自ら信じることがあるのかと問わなければいけないということです。

「教師自身に信の確立がなされずして子弟にのみ信の確立を望むことは木に縁って魚を求むる業で、これほど矛盾したことはないであらう」(『全集』414頁)

これは、教師自身が信の確立をしないのに、教えられる子供たちに信じろと言っているのは、木に登って魚をとろうとしていることと同じであり、矛盾もはなはだしい。教師自身に突きつけられている1つのポイントですね。

「如何なる場合でも、信は生活力の増大であり、不信は生活力の減退であり、疑惑はその停滞である」(『全集』415頁)

「要するに、人生は、信の上に立つといてよい」(『全集』416頁)

いい言葉ですね。全てを語りつくしていますね。確かに、人生は信の上に立つ。信じていなかったら何もできません。店で売っているものが、信じられなくなったら、私たちはご飯が食べられません。車に乗っても、この車がちゃんと走ってくれない、危ないとなったら凄く大変ですよ。信の上に立つといえます。

「斯様に率直なる告白をなすと、読者諸君の中には、さながら自分にでも当てつけて、信を強ひたかの如き感情を以て、ひがむものがあらうことを多く経験するのであるが、ありがた迷惑の至りで、そこに異常な現象たることが察せられるであらう」(『全集』417頁)

これが最後に書いてあることです。信が大事と言っても信じられないと言う人がいたのでしょうか。これは強いているのではなく、最も大事だから言っているのだと。いろいろと批判をする人がいたのでしょうか。それを全部踏まえた上で、信が大事なのだというのを、牧口先生は主張しています。

「創価教育学の根本精神を明かにすると共に、それなるが故に吾々の仲間は真実なる深い交りをなし、虚偽の生活は必ず相成らぬといふ心境だけを申したまでである。されば同じ深交によって、功德を共にしたくない方には用のない事柄と解されたいのである」(『全集』417頁)

信じるのが大事だと言う人と共に私たちはやっていくのだ。それが根本精神だ。そういうも

のの仲間になりたくない人は、仲間にならなくてもいいよ、という絶対なる自信ですね。

以上が『創価教育学梗概』の全体の流れでございます。午前中は、創価教育の根幹をお話しました。午後は、これを今の形でどう展開するのかを創立者が話されていますので、『人間教育への新しき潮流』（第三文明社、2014年）という本を使って勉強したいと思います。

4. 牧口とデューイの教育哲学

ここまでは、牧口先生が、そもそもどういう形で創価教育を考えられたのかということと、それを実践することが大事だということ、そして、昭和14年に理論が固まって、それを実践するために創価大学をつくりたいといわれたということを話しました。昭和14年に牧口先生が創価大学をつくろうという決意をしなかったら、今の創価大学はありません。一人の人間が決意をして何とか実現しようと思うと、それは、50年後、100年後に凄い影響力を及ぼすということです。

創価大学が目指すものとは何か。創価というのは価値の創造であるとは、牧口先生が提唱されていることです。これは、創価教育の実践ということになります。正門の石標は牧口先生の「創価大学」という文字で、中央教育棟のものは池田先生の「創価大学」という文字です。創価大学では初めて使わせて頂いたものです。

昭和14年に牧口先生が、創価大学を作ろうと表明します。それは、「将来、私が研究している創価教育学の学校を必ず設立したい。私の代に設立できない時は、戸田君の代で作るのだ。小学校から大学まで私の研究している創価教育学の学校ができるのだ」と言われた。戸田先生は、戦後、出獄されて、戸田先生の全ての事業が潰れて何もかもなくなって、1950年、昭和25年8月23日に最後の事業である東京建設信用組合という金融機関ですが、最後の砦だったものが、東京都から営業停止処分になりました。その同じ年の11月に、戸田先生は池田先生と、この構想を語り合っています。「大作、創価大学をつくろうな。私の健在のうちにできればいいが、だめかもしれない。その時は大作、頼むよ。世界第一の大学にしようではないか」と。そのとき、池田先生の胸の中に灯がともされて、それ以来、温められて、創価大学の設立構想を発表されたのが、1964年（昭和39）で、今から50年前ですね。今年は、池田先生が創価大学設立構想を発表されて50周年の佳節になります。開学の時に池田先生が言われた言葉ですが、「私は牧口先生の構想を何回となく戸田先生から聞かせていただきました。そのたびに、もしも戸田先生の代で実現しなければ、必ずや私の力で決意しました。師の構想を全て引き継ぎ実現してゆく。そこにこそ真の弟子の道があると信じてきたからです」と。師匠が言われた言葉を実現しなかったらどうなるのかを考えてみると、戸田先生が、世界第一の大学をつくろうなといわれ、池田先生が、その為の努力をしないと、戸田先生が嘘をついたことになります。戸田先生がいかに偉大だといってみても、師匠がいわれたことを嘘にしないで、実現し、正しさを証明するのは弟子なのです。

弟子にしかできません。私たちも同じですね。池田先生がいわれたことを、私たちが実現できなかったら、それは池田先生が嘘をいったことになってしまう。池田先生の偉大さを証明するのは、弟子の私たちだということ、これは1つの法則ですね。これは、価値創造という言葉に含まれた重要な法則だということでしょう。このことを念頭に入れておいて下さい。その上で、教育学の話や師弟の話等をしたいと思います。

『人間教育への新しき潮流』という本ですが、章立てを見てみますと、4章立てになっています。第1章、デューイ哲学の光源、第2章、教育の使命、第3章、対話と民主主義、第4章、科学・哲学・宗教、の4章です。この本は、ジム・ガリソン（バージニア工科大学教育哲学教授、ジョン・デューイ協会元会長）、ラリー・ヒックマン（南イリノイ大学カーボンデール校哲学教授、デューイ研究センター所長）のお二人と創始者・池田先生との対談集です。ジム・ガリソン教授は、バージニア工科大学ですから、理系の大学なのですが、教育哲学の先生です。哲学は人文系ですから、理系とは関係がないように思われるかもしれませんが、理系の科目を勉強するのに一番大事なものは、倫理だということです。倫理が間違えると、人間にとって便利なものを作ったとしても、逆に人間にとって害になることもある。これは、例えば原子力がそうです。人間のためにと思って作ったけれども、倫理がなければ、金儲けのためには誰に売ってもいいということになる。そうすると悪用されて、人間に害を及ぼします。ですから、倫理は非常に重要で、哲学が不可欠になってきます。人文系と理系は全く離れているように思われるかもしれませんが、根底で結びついていないと、人間の英知が逆に悪用されかねない。そのために、ジム・ガリソン教授は、大学で教育哲学の教鞭をとっているということです。ジョン・デューイ協会の会長を務められていました。ラリー・ヒックマン教授は、南イリノイ大学カーボンデール校哲学教授で、そこに設置されているデューイ研究センター所長も兼任されています。ジョン・デューイは、アメリカでは非常に有名な教育学の先生で、この教育方針に従って、実験的な教育が行われています。

2007年2月に、私と当時の創価教育研究所の事務長だった塩原さんと富岡所員の3人で、このデューイ研究センターを訪問しました。訪問の目的は、創価教育研究所とジョン・デューイ研究センターとの間で学術交流を締結することで、創価教育研究センターの下にジョン・デューイ研究センターを設置することでした。日本でジョン・デューイ研究センターを設置しているのは創価大学だけです。世界でも4つしかありません。牧口先生とジョン・デューイの時代は、そんなに離れていません。牧口先生は、1871年生まれで、1944年に亡くなっています。ジョン・デューイは、1859年生まれで、1952年に亡くなっています。牧口先生よりも長生きしています。ジョン・デューイは、教育とは実践で、子供たちの持っている力を引き出すにはどうしたらいいかということを考え続けた人で、牧口先生と似ています。ジョン・デューイは、創価大学としては大事な研究対象の一人です。

ラリー・ヒックマン教授はこんなことを言っています。

「(牧口とデューイの) 2 人は、“教育とは生きるための〈準備〉というより、むしろ言葉の最も十全な意味における〈生きること〉それ自体なのだ” ということで一致していました」(『人間教育の新しい潮流』第三文明社、2014 年、15 頁。以下『潮流』と略記する)

教育というのは生きるための準備ではない。生きていることそのものが教育だということです。生きるための糧だとか生きるための道具だとかというのではなく、生きることそのものだということで、牧口とデューイは一致しているということですね。デューイの有名な本『経験と教育』を取り上げて、3 人は語り合います。

「私たち人間は、世代から世代へ、終わりのなき創造の営みを続ける創造者として作られている。そして、創造者としての営みは、恐らく種そのものが途絶えるまで続く」(『潮流』37 頁)

こういう一文が載っています。これを読んだときにジム・ガリソン教授は、これこそが創価哲学であり、創価哲学と同じだといいます。創価哲学とデューイのいうことが一緒なのだということを感じて、その時に創価に出会ったという印象を述べています。創造者という言葉を知ると、キリスト教の神を思い浮かべますよね。キリスト教の考え方は、根本は、世の中は全て神が作ったものであり、人間も神によって作られたものなので、その存在そのものが既に神とは違うので、神には逆らえない。だから神の思いのままに、というようになる。ここでいわれている創造者というのは、その言葉に慣れているから使われているという風に解釈できますが、やはりキリスト教の影響は、ぬぐいきれないように思います。ここでいわれているのは、人間というのは一体どういう存在なのかということを、デューイは考えたわけですが、常に人間というのは何かを創造し続けているもので、その創造していることこそが、人間としての存在価値であり、創造するということは、人間としての種そのものが絶えるまでずっと続くものである。つまり人間は生まれてきて以来ずっと何かを創造するという行為を続けるのだといっています。そういう意味では、デューイは神を人間とは違う存在とは考えていない。要は、宗教をどう考えるか。宗教は何のためにあるのか、突き詰めてとことんまで考えていくと、結局人間がいなかったら宗教は必要ではない。もともとあるものではなく、人間が作り出したものであるから、人間がいなければ存在しない。実は、そこが創造なのです。宗派などを全て抜きにして宗教とは何だろうと考えて、考え抜いた末にこれにたどり着いたというふうに見ると、これはキリスト教だけに限られる話ではなく、もっと大きな話になってくる。要するに、全部人間が生み出してきたことなのです。人間がすぎるもの、頼りにするものですら、目指すものですら、結局は人間が生み出したものなのです。人間が作り出したものなのだと。自然現象は作れませんけれども、牧口先生は、自然現象を人間は作り出せないのだから、そこに価値を付加するのだから、創造なのだということで、これは

『創価教育学体系』の最初のところに出てきます。そういうことなのですね。そういう意味では、デューイと一致しているということが読み取れてきます。

ラリー・ヒックマン教授は、

「デューイの教育哲学は、地理と歴史を中心に、宗教的、民族的ドグマを含む権威主義的な立場と、もう一方の『すべては等価値である』と考える相対主義のもたらす絶望感の間の“中道”を探求しているのです」（『潮流』50頁）

こういう言い方をしていますね。デューイという人は、地理と歴史が大事で、地理と歴史を知らなければ、何の学問も始まらないということをいっています。そういう意味では、牧口先生も地理学から入っていますね。これは非常に大きな影響がある。人間は何によって一番大きな影響を受けているのかというと、自分の住んでいるこの空間、郷土と、何故自分はここにいるのかを考えて先祖をたどる時間的な広がりという歴史ですね。その中で人間とは何か、人間はどうあるべきなのかということを考えることなのです。

デューイの考え方は、地理と歴史を中心に人間があるべき本来の姿を求めていく、そういうようなことが大事だという考え方です。それで、極端な例で考えてみますと、一方ではドグマ、権威主義。こうであらねばならない、こうであるはずだ、というある意味非常に拘束力の強い、人間の考え方に自由を許さない、大きな権威の下で人間が動いているというような、ある大きな意思にしたがわなければならない、非常に専制的な原理だけで動いているようなことになるでしょうか。これに人間はおちいりやすいのです。こうなることは一番簡単ですね。だから、歴史上、専制主義国家とかヒットラーのような人間を自ら選んでしまう。ヒットラーは自分がそうなったのではなく、あの人が良いと当時のドイツ国民が選んだのです。そういうことが片一方で出てくる。またもう片一方では、差別は無い。皆同じで平等なのだ。差があってはいけないというような全て等価値であるという、これが極端になると共産主義ですね。でも皆同じということはありませんか。男性と女性は違うし、顔も皆同じだったら可笑しいよね。顔が違ったらそれで既に差になっている。性格だって皆違う。そこまではいわないけれども、経済的には平等ということも極端な話です。その2つがぶつかりあう。これは、デューイが生きていた時代の1つの大きな問題だったわけです。これが、今後も恐らく出てくる。気をつけないとこれに巻き込まれる。デューイは、その両極端の中道を選ぶことが積み重なって、教育哲学になった。これが牧口とどう関係してくるのかという話です。

5. 創価教育と師弟論

デューイが卒業したバーモント大学にあるデューイの墓標には、こういう一節が書かれています。『誰でも信仰』という本の中の一節です。

「文明のなかで、最も大切なものは、私たち自身のものではない。それは、私たちが一員であるところの、たゆみなき人間社会の営みや辛勞の賜物として存在するのである」(『潮流』75頁)

つまり文明の中で最も大切なもの、大事なもの、将来にわたって引き継いでいくもの、それは私自身ではなく、むしろその私たちが生きていた、一員として生きていた中で出てきたものといっています。

「私たちの責任は、受け継いだ遺産としての価値を守り、伝え、改善し、大きくすることである」(75頁)

特にこの凄く重要なところは、価値を守って伝えて改善していくことなのだ、という点でしょう。

「そして、あとに続く人たちが、私たちが受け継いだときよりも、さらに確かなかたちで、その価値を受け継ぎ、さらに多くの人びとのあいだで、豊かに分かち合えるようにすることである」(75頁)

これは、「第1章 デューイ哲学の光源」の中の哲学の話ですが、ここはちょっと難しいです。デューイの考え方は、価値を受け継いでいくことなのだということ。だから、普通のヨーロッパの人たちが考えることと多少違います。ちょっと広い。それに対して、牧口教育論。デューイと比べてみて下さい。『創価教育学体系』の中で、牧口先生はこんなふうに書いています。

「おれが如く偉くなれ、というような傲慢の態度を示して、子弟を率いるのではなくして、余が如きものに満足してはならぬ、更に偉大なる人物を目標として進まねばならぬ、という謙遜の態度を以て子弟を導き、それが為には余と共に余が進みつつあるが如くに進めと、奨励するこそ、教師のなさねばならぬ正当の途である」(『潮流』96頁)

だから、私のように偉くなれ、私を見本にしてというのは本当の教育者ではない。私のような人間がいてはだめなのだ。けれども、私も一緒に目指して何かをやろうとしているのだから、私と一緒にその目的を目指そうよというのが、本来教師のとるべき態度なのだといっています。だから先ほど、デューイがいったこともある意味同じで、私たちが何かをするのではなく、私たちが受け継いだもの、受け継いだのだから更にそれを大きくして次の人たちに受け継いでもらうということですね。バトンタッチの1つの営みが、教育なのだということを言いたいのだと思います。だから、先にも述べましたように教育というのは生きる準備ではなくて、生きるということ、そのものが教育なのだ。つまり自分たちが存在することによって、何かを引き継ぎ、託しているのです。生きているだけで凄く影響力があるわけです。人間は、自分が存在するだけで、色々な人にいろいろなことを考えさせているわけです。会って色々な話をしますよね。良いときは凄い

人だなと思いますし、変なときは、なんだこんな人かと思うわけで、両方あって影響を与えていることになりますよね。それがあつ種の教育なのではないかと。本来は、なかなかそれができないですが、それが教室の中で、あるいは教師と生徒や学生の間で、そういうことが行われてくることが凄く大事で、その引継ぐものは何かといえば価値なのです。

「牧口会長は、『青』は藍より出でて藍より青し。これが、創価教育の特色なんだ』と、常々、語っていました」(『潮流』99頁)

これは、牧口先生が常々言われていたことだ、ということを池田先生が語られています。「従藍而青」が創価教育の特色なのだといわれています。このあたりがデューイと同じなのだという語らいになっています。自分よりもっと輝かせる存在に、ということなのですね。これは、なかなか難しいですよ。ついつい教師というのは威張りたがるんです。私たちが、後輩に対して、よりよきものを生み出すような人になってもらいたいという教育が大事だということですね。これは論理としては分かります。けれども、どうすればいいのか。これがなかなか難しい。実際、自分はどうすればいいのか分かりたくて、ずっと勉強しているのですが、なかなか分かりません。

ここから具体的な方法として、師弟という問題に入ってきます。自分よりも教えられる人たちのほうが偉くなる。「従藍而青」、自分たちが持ってきた価値を伝えて、それを改善し、より大きなものにしてもらおう。伝達の方法は、師弟でやるしかないので、ジム・ガリソン教授は、『師弟の関係』を、教師と学生がともに力を合わせて探求する関係として理解しています」といわれています。つまり共に探求するのだということです。教室の中で皆さんにお話ししていますが、これは師弟関係とはいいません。共に何かをするということが難しい。高校、中学校、小学校は、教壇が高くできています。つまり先生の話聞くようにできている。上から声をかける。大学は、中央教育棟ができるときに、できるだけ学生が座っている席を高くしてくれとお願いしました。つまり学生は教師を見下ろして聞くべきで、何故かという、共に力を合わせて探求するのだから、むしろ教師の話聞いてここは違うだろうと言えるほうがいい。欧米の大学は、学生の席のほうが高いです。特に大学ではそれが本来のあり方だろうと思います。お互いが議論し、何のために議論するのか。お互いが何か知りたいことがあるから、見つけたいことがあるから、分かりたいことがあるから。それを理解する為に、私が問題提起をします。これはこういうことでどうだろうかと。それで議論をする。一方的に聞いているだけでは、師弟関係ではありません。相互作用がないとだめですね。だからこそ、池田先生は、「弟子の生命のなかに、師匠が永遠に若々しく生き続けていく」といわれています。それを聞いて、ジム・ガリソン教授は、「戸田会長の最大の業績は、池田会長であると思います」という言い方をします。私たちの最大の業績は、次にバトンタッチした人が、どのような人になるかによって決まる。私自身の価値は、私が決めるのではない。次の人が決めてくれる。それが師弟関係ではないかといわれています。池田先生の

業績をどうするのかは、私たちにかかっています。私たちが頑張らないと先生の業績になりません。牧口先生を輝かせたのは戸田先生、戸田先生を輝かせたのは池田先生、池田先生が輝いたからこそ、戸田先生の最大の業績は池田先生だ、とジム・ガリソン教授は言われています。これが法則です。池田先生を輝かせるには、創価大学で勉強した学生達が、何かの形で多くの人たちに貢献をし、またこの人たちが、次の後継者を作って初めて、ああなるほど池田先生はこういう人を作ったんだねという話になって、池田先生が輝く、ということが師弟の法則ではないかということです。そうなる初めて、「弟子の生命のなかに、師匠が永遠に若々しく生き続けていく」ということになります。いつも言っていることですが、池田先生は牧口先生に会ったことはありません。何故、牧口先生のことをそんなに理解できるのかというと、戸田先生が牧口先生のあらゆることを池田先生に伝えたからです。そこで初めて、戸田先生をつくったのは牧口先生だということを池田先生は知ったのですね。牧口先生はこういう人だったんだということがわかった。私たちも、戸田先生に会ったことはないのですが。実は、私は戸田先生にお会いしたことがあるみたいです。家が大変なときに、戸田先生にお会いして頭をなでられ、「ぼうず、しっかり親孝行するんだぞ」と言われたみたいですが、何にも覚えていません。母親はそれを最後の砦にして生きてきたみたいです。私のことは、どうでもいいので話しをもどしましょう。私たちは、戸田先生のことを池田先生からお聞きして、いろいろなことを知りますよね。こういうことをやっていたんだとか、こういう人だったんだとかという話を聞くと、すごいと思いますね。池田先生は、『師弟』の焦点は、実は弟子にあり、『一切は弟子で決まる』のです」と言われています。だからこそ今、弟子だと思っている人たちの存在は非常に大きいということです。師匠が大きいということは、それ以上に弟子がやらなければならないことが多くなるということで、非常に苦しいです。創価大学で教鞭をとっていて、池田先生の哲学とか思想性とかを受け継いで学生達に伝えていくのは非常に大変です。ほんとにこれでいいのだろうかということを、絶えず反省し振り返ります。今私たちが教えている学生達がそうならなかったら、池田先生に顔向けができません。弟子の勝利は師匠の勝利で、勝利とは何なのかを突きつけられています。それをどうとらえるかは一人ひとりの問題です。

「牧口会長にとっても、その信仰の深化は、『法』の探求と実践のなかにあったのです」（『潮流』71頁）

「法」というのが一体何であったのか、どういうものであったのかということを思索して、探求した。探求だけだったら分からないが、そこに実践があるから分かるということなんですね。そして、師弟について注意をしなければならない点に触れていきます。

「一般的に師弟には、人格的な一对一の『実存的体験』の継承という要素があります」（『潮流』71頁）

この人格的な一對一の「実存的体験」の継承とは一体何かというと、例えば先生と出会って、先生からこういう激励をされました、という体験ですね。私のことを話すと、我が家はそんなに裕福ではなかったので、大学に進学することも大変でした。それで、早く大学を卒業して、会社に就職して、お給料貰って、少しでも親を楽にさせたいと思っていました。大学2年のときに、校内でばったり池田先生にお会いしました。その頃は、先生も絶えず大学にいらして、キャンパスを歩かれていました。先生が建物の脇から突然出ていらしたので、私も驚いて、その時先生が、「大学院にいったらどうだ」といわれて、何故か私も、「はい」と答えてしまい、私の持っていた構想は崩れ、嫌いな英語を一生懸命勉強してマスター（修士課程）に入りました。そして今度は、2年間で修了して、親も大変だからと思っていたら、マスターの終わりに、また先生に出会い、「ドクター（博士課程）に進んだらどうだ」と言われました。また、「はい」と答えて何とかドクターに合格して、先生に博士課程に通りましたとご報告したら、笑顔になられて「そうか、よかったな、下手な鉄砲も数打てば当たるな」と言われました。とても喜ばれていたことを覚えています。これが僕の実存体験です。

「著作として後世に伝える場合も、内容から、この実存的体験が欠けてしまえば、本来の師の思想も言葉だけの形式となり、生気を失ってしまう」（『潮流』71頁）

つまり先生の本を一生懸命読んでみると、本の文字は池田先生の音になっている。実存的体験があるから、こういう発言はしますよ、ということを伝えることができる。色々な方が、色々な実存的体験があると思います。先生からお手紙を頂いた、お会いした時、激励していただいた、という実存的体験がある。だから、例えば新聞で先生の語られている言葉も、生の言葉として感情で伝えられる。思想性がきちんと肉声として伝えられる。思想とか哲学が形式ではなく、生の言葉として伝えられるということです。

「しかし、『法』の探求と実践の深化がないまま実存的体験という要素だけを強調しすぎると、物理的・時間的な理由で師と直接に出会えなかった人々に、師の本当の教えが届かなくなってしまう」（『潮流』71頁）

どういうことかということ、私は先生にお会いしたことがある。お会いしたことがあるから、私の言うことは正しい、私が言うことが先生の言いたいことなんだと言い続けて、後世にこれが残った時に、もし先生に出会ったことがない人たちは、分からないということになってしまう。先生の語った言葉や示した理想というものは、自分にとって全く関係の無い形式的な空論になってしまう。あまりにも自分の体験というものを強調しすぎると、そういうことになりかねません。これは、そのとおりですよ。私は今自分の体験を語りましたが、こればかり言い続けると、先生にお会いできなかった学生達は、どうなりますか。私たちは、卒業式で先生にお会いできて、

先生のお話も聞いて、話すことが、ある種の空気で伝わってきた。けれども、これからの学生達は、先生と出会ったことが無く、活字で読むしか理解できないとなると、実態が伝わりにくくなる。そここのところをどうするのか。池田先生は「さまざまな師弟関係に共通する難題かも知れません」といわれています。会ったことがある人間が強調しすぎて、それが会ったことのない人との間で差別を生む。その差別によって、本来伝わらなくてはならない思想性が伝わらない。しかし、実存的体験が、ある種語り継がれていかないと、その思想性は、言葉だけに終わってしまう。本当に生きた思想として伝わらない。難しいですね。先生もそういわれています。師弟関係を考える人は、そここのところにおつかる。創価大学もこれから先、私たちのときは創立者がいらして、創立者にお目にかかって、様々なことを教えていただいた。だけどそれができなくなった。これから入学してくる学生達は、それは無いのですね。無い学生達に、如何に池田先生を実在する人物として伝えられるのか。彼らが、次に伝えていけるのか。そこは創価教育として重要なところですよ。私たちも戸田先生のことを池田先生から聞いているから、生身の人間として受け止められるし、その続きで、牧口先生も全然見たこともないし、声を聞いたことも無いけれども、こういうご苦労をされてきたんだと、と生きて歩く牧口先生を想像できる。これが例えば、釈迦やキリストは想像できますか。日蓮大聖人はどうですか。こういう人物だったんだとは言いがたいでしょう。哲学や思想を伝える時には、このような問題が常に存在しています。それは教育においても重要な部分です。これを考え出すと眠れなくなります。この問題について、良い解決方法はありません。その師弟関係を話した上で、難しい関係だということを言った上で、次に3人が話を進めていって、大学というところに行きつきます。

6. 創価教育と創価大学

1 番目が教育の哲学、やや抽象論的な人間とは何か、教育とは何か、という話で、次に師弟の話になって、初めて教育とは、一对一の人間と人間とのつながりなんだということになります。面白いことが書いてありましてね。池田先生が「ダイヤモンドは、ダイヤモンドによってしか磨かれないように、人間もまた人間によってしか磨かれないものです」と言われています。だから一对一の対話とか付き合いが非常に重要になってきます。だから教育も本とかインターネットだけではだめなのです。一对一の人間の関係の中でしか、本当の教育はないのです。磨くとはどういうことかといえば、人間が本来持っているもの、磨けば光るものが絶対ある。その磨けば光るものは、人間にしか磨けない。自分だけでは磨けなくて、人間と付き合わなければ磨けない。それが教育なのだと。

それを踏まえた上で、大学は高等教育機関で、初等教育、中等教育があつて高等教育になります。この高等教育とは何か。池田先生は、「この地上にあつて、いずこにもまして開かれた『知性と精神の広場』こそ大学です」と言われています。「知性と精神の広場」とは何か。「それは『真理』に開かれ、『未来』に開かれています」と言われています。つまりこれは、逆に言いますと、真理を探究しなければいけないということです。未来というのはどうすればいいのか、それ

を考えなければならない、というように読まない、言葉だけで終わる。

その中で、池田先生が強調されているのは、「読書と語学は、相手の側に立つグローバルな視野を育んでくれます」と。読書と語学は欠かすことのできない非常に重要なものです。グローバルな視野を育むということです。確かに今の学生達には、読書と語学は重要で、特に読書は欠かせない。最近の学生は本を読まないとよく聞きますが、本が読めない、漢字があまり読めません。本を読むと人生が変わる。人生は本の読み方を変える。その意味において、ここで述べられていることは何かといえば、人間は人間でしか磨かれない。だからいろいろな人間に会わなければならない。しかしながら人間は、会話ができる人、その人の体験を疑似体験できるということは、そんなに多くはありません。その疑似体験をもたしてくれるのが、読書なのということです。読書によって、自分が会ったことがない人たちにも会える。時間を越えてその人たちに語りかけることもできる。だからこそ読書が大事だということです。

デューイは「大学教育の永続的かつ有意義な帰結は、人間性の陶冶になくてはならない」といっています。人間性を磨くことですね。色々な言い方がありますが、大体同じようなことを言っています。さらに突き進んでいくと、大学でやるべきことは何なのか、語学や読書、特に人間を磨いて視野を広くして、それこそが大学がやるべき教育だ。学生達もそれを1つの成果として、自分たちの宝物として社会に出て、伝えていくということになります。その究極のところの大学とは一体何なのかということで、創立の精神ということにテーマが移っていきます。

池田先生は「時代の波濤を超えて鍛え上げられ、長く引き継がれてきた『創立の精神』には、大学のよき伝統や精神風土を育む根幹の力があります」と述べられています。ジム・ガリソン教授は、「自らの過去を理解せず、過去に誇りをもたない大学には、未来はないといえましょう。しかし、創立の伝統のうち、何を維持し、何を変革すべきかについては、それぞれの世代が問うべき課題であると思います」と言われています。これはさきほども言いましたが、価値を受け継ぐだけではなく改善しなければならない。そしてそれを大きくしなければならない。そしてそれを引き継がなければならない。そのような原理を具体的に示したのが、この言葉になります。

創立の精神とは、基本的に生命といいますか、根幹といいますか、大事なことです。これで大学のカラーが決まります。いろいろな大学の卒業生の方がおられますが、眺めるとなんとなくその大学の雰囲気というのがありますね。慶応大学には慶応大学を卒業した人の雰囲気があります。早稲田には早稲田の雰囲気があります。東大には東大の雰囲気がありますね。これは一体何なのかというと、創立の精神、もともと引き継いでいるキャンパスの雰囲気、空気、流れている音、吹いている風、音楽、聞こえてくる音、声、そういうものが違うということです。それは創立の精神に基づいたものになっているはずです。この学校が目指すものを、自分も目指すのだというものが、一人ひとり大小様々なものがあるのでしょうけれども、そういうものが重なり合って、大学というものができている。いまインターネットの大学、講義が流行っています。それで学問

が身につくのかといえば、身につきます。けれども、大学を卒業した卒業生としての、何か目に見えない力は付かない。それが付くくらいなら、全部インターネットにしたほうが良い。こんな対面の授業なんてやる必要は無い。キャンパスも必要ない。しかし、創立の精神はキャンパスに長く留まって残っている。学問の知識というものを伝達する以外に、もっといろいろなものを伝達する必要がある。それが、創立の精神、大学のカラー、特色ということになるのです。だから創価には創価のカラーがあります。ある企業の人事担当者の方が、やっぱり創価大学には創価大学生のカラーがあるとされます。それはどういうものですかと聞くと、真面目、何をやるにも真面目。欠陥とは聞くと、遊びが少ない、汲々としている、つまりゆとりが無く、なかなか危なっかしいと。これには、多少納得するところがあります。何を維持して、何を变えればいいのかということは、これからの創価大学の自主性を通じて育てられていく学生達が、考えていくことです。

本学の建学の精神は、「人間教育の最高学府たれ」「新しき大文化建設の揺籃たれ」「人類の平和を守るフォートレス（要塞）たれ」、この3つですね。これが創価大学を貫き通す骨格です。卒業生たちは、いろいろなことにぶつかると、この建学の精神を思い浮かべながら、何かやろう、という気持ちになるそうです。現役の学生も、行き詰った時には、これに立ち返ろうとします。この建学の精神は、どういう所で、どういう形で出てきたのかということです。昭和44年（1969）5月3日に創立者から発表されました。開学の2年前です。創立者は、『人間教育の最高学府たれ』というのは一体何か。これは人間を社会のメカニズムの部品と化し、人間性を無視している現代の教育界の実情に対して、創価大学はあくまでも社会を動かし、社会をリードしてゆく英知と創造性に富んだ全体人間を作っていく大学でなければならないという意味です」といわれています。この当時の社会がどうだったのかというと、高度経済成長が続いて、人間というものが、部品として、何か最終製品を作るために磨耗しているようで、人間らしい扱いを受けていない社会だった。そして、そういう人間さえできればいいのだという教育にたいして、創価大学は違う。あくまでも社会をリードしていくのは人間であって、その人間はどうあらねばならないかということ、英知と創造性に富んだ人間で、そういう人間を作らなければならないのだと。

次の「新しき大文化建設の揺籃たれ」ですが、「行き詰っている現代文明のなかにあって大仏法を根底にしたとき、人間生命の限りなき開花を基調とする新しい大文化を担っていることである」と。現代文明は行き詰っているから、法華經の目からみて、変えていかなければならないというのが創立者の発想です。それは、牧口先生が、自らの教育の根底は、法華經と同じなのだという言い方をされていましたね。それを引き継いで、大仏法、法華經に基づいた1つの法則というものをもって、人間の生命を見つめなおしていくのだという発想ですね。法華經が重要ですね。

ジム・ガリソン教授が法華經を読んで、とてつもなく感動したというところがあります。

さまざまな障害を乗り越え、悪を克服する方途を見いだすことが、自己認識と道徳的成長のためにどれほど大切であるか。そのことを私が初めて深く自覚できたのは『法華経の智慧』を読んでいたときのことです。とくに、心に残るのは次の一節です。『善も悪も実体ではない。空であり、関係性によって生ずる。だからこそ、たえず善に向かう心が大事であり、行動が大事なのです』。この言葉に触れたとき、私の『善』と『悪』に関する理解は一気に深まり、大きく変わりました。そこで、このテーマに関するデューイの著書を読み返したところ、次のような箇所を見つけました。デューイはこう述べています。『この世には、善と悪の混合が存在する。もし少しでもそれらを理想的な目標に示される善の方向へと再構築しようとするなら、それは絶えざる協調的な努力によって行われなければならない』。なんと素晴らしい一致ではありませんか！（『潮流』405-6頁）

つまり善と悪というのは、どうにでもなる、どっちにも転ぶということです。だから自分の倫理観を掲げようとして、良いことと悪いことがあったら、絶対良いことを選ぶのだという倫理観に立つためには、絶えず善のものと触れあって、善のものの方向に向かうことが大事になってきます。では善のものとは何か。それは一人ひとりが受けた教育、考えていること、歩んできた人生、というもので決まってきます。

最後の「人類の平和を守るフォートレス（要塞）たれ」ですが、「人類の平和を標榜したゆえんは、新しき文明の建設といい、未来社会の開拓といっても、平和なくしてはありえないからであります」と。平和というのは、今の創価大学の学生達にも刺さっています。平和のためにとよく言います。それを目指して何かやろうとしているのですね。それは具体的にいえば、貧困の撲滅、格差社会の解消等、それぞれ皆テーマがあります。それを勉強しようとしています。貧困の撲滅を掲げる学生は、貧困の実態が分からないので、その実態をみるために夏休みに外国へ出かけていきます。その貧困の撲滅がイコール平和につながるという認識がある。確かにそれはそうですね。争いごとというのは、経済の問題から起こってきます。貧困の問題を自分の問題として考えられるというのは、創価大学の創立の精神に基づいていますし、特色だろうと思います。これが、創立者が掲げた3つのモットーの中味です。さらに具体的に創立者は示そうとしています。

これは、1973年、昭和48年の第3回入学式での講演です。重要な講演の1つです。

「大学の本来の使命を認識したうえで、皆さん方に次のことを要望したいのであります。それは『創造の人間であれ』ということであり、わが創価大学の『創価』とは、価値創造ということであり、すなわち、社会に必要な価値を創造し、健全な価値を提供し、あるいは還元していくというのが、創価大学の本来めざすものでなければならない」（創価教育研究所編『創立の精神を学ぶ』2014年改訂版、182頁）

これが創価大学設立の意義です。言葉としては分かります。では何をすればいいのかは、なかなか難しいです。必要な価値を創造するとは一体何か。これは大なり小なり色々な価値がありま

す。たとえば、体の不自由な方に何か道具を作るということ等、いろいろなことがあります。それを創造し、提供し、還元していくことが、本来の創価大学が目指すものである。つまり価値を創造して、それを社会に還元していく。それこそが大事だといわれています。

そして更にその翌年、第4回入学式のときに、キーワードである創造という概念について次のようにいわれています。

「私の胸にあふれてやまぬ『創造』という言葉の実感とは、自己の全存在をかけて、悔いなき仕事を続けたときの自己拡大の生命の勝ちどきであり、汗と涙の結晶作業以外の何物でもありません」(前掲書、218頁)

つまり創造という言葉の実感はどこにあるかという、自己の全存在をかけて悔いなき仕事を続けたとき、これが実感だといわれています。そうした時が、創立者が自分は創造者なのだと思います。最初にデューイの創造者の話をしました。その時に、キリスト教の話をしました。創造者というとイエス・キリストと一致するといいましたが、それと、ここでいうところの創造は、全く意味が違います。創造という言葉が、西欧での創造ということと、われわれのいう創造とは、少し違う。ジム・ガリソン教授とラリー・ヒックマン教授は、デューイのもつ創造の概念が「創価」に非常に近くなってきているというのです。同じ教育哲学を勉強し、デューイや牧口を勉強したことによって、自らが創造して変わっていくといひましょうか、デューイも、人間というのは変化し続けるといっています。

「創造的生命こそ、人間の人間たるゆえんである」(前掲書、219頁)

「この『創造的生命』の開花を、私はヒューマン・レボリューション、すなわち『人間革命』と呼びたい。これこそ諸君の今日の、そして生涯かけての課題なのであります」(前掲書、220頁)

人間革命とは何か。創造し続ける人間とは、自分が悔いない仕事を続けていくことであり、そのような人間になっていき、社会に還元をしていくところに、創価大学設立の意義があるということです。これは、言うは易く行は難しで、実行するのは大変です。言葉としては分かりますが、どうやって実生活の中に転化していくのかは重要な課題です。

ここからは、私個人のつぶやきですが、私自身が創価大学にいて、創立の精神というものを何とか実現したい、創立の精神に基づいて教育したいと思うと、その実践は学生を創造の人間に育成することなのです。つまり、自分が生涯をかけて貫き通す仕事は一体何なのかということ、一人ひとりに理解し、見つけてもらうことです。夢や理想というのは、向こうから歩いてきません。自分が努力しなければならない。

私の研究室の卒業生に、お笑いの芸人がいまして、苦勞して苦勞してぼろぼろになっていまし

たので、やめろと言いました。売れないのだから人生を台無しにするぞと。その時に、その2人は、自分たちは夢のために頑張ってきたんですから、もうちょっと頑張らせてくださいと言いました。卒業して3年くらいの時ですね。その後、その夢が実現して、今は売れる芸人になりました。学生自身が、自らの創造性を開花させ、その道で自分たちが創造した価値を届けたいと思っていたんですね。学生を創造的人間にすることは凄いことです。それは、学生自身が自らの可能性を開花させる、その手伝いができるということですね。そこまでできれば勝ちです。大学の教師は、学生を育てることなどできません。自ら育っていけるように手助けすることしかできないと理解しています。これは1つの法則ですから、大学生だけではないと思います。社会の色々な人たちにも、これはあてはまると思います。「創造的人間たれ」と、自分自身に問いかけ続けることなのだと思います。牧口先生が、児童たちに信じることを要求しているのだから、教師自身が信じていないというのはおかしいといわれましたが、これと同じで、「創造的人間であれ」という創価大学のテーマを学生達という側の人間は、創造的人間なのかと問われます。恐らく、この法則が、創価教育の法則だろうと思います。つまり他人にいうのなら、自分がまず、創造的人間であり続けなければならない。

最後に、自らが価値創造者たれと言いましたが、私自身も、今日ここにお集まりの皆様も恐らくそういうことなのではないでしょうか。本来の教育のあり方として、これができるようになって初めて創価教育が根付いて、明治、大正、昭和と変わらず問題になってきた教育というもののあり方、実際の生活と結びつかない教育の仕方が、変わるということではないでしょうか。これは、教育関係者だけでは変わらないから、皆で考えようというのが、恐らく創価教育の法則なのだろうと思います。だから教育学から入りましたが、宗教運動論に広がっていくことは必然だったということです。以上が、本日の講座です。今後は、「創価教育学会史」のようなテーマになるのかなと思います。

教育を変えるには、人間が変わらなければならない。人間とは何かといえば、教育関係者だけではなく、私たち全ての人間にあてはまる、ということをもって、本日の1つの結論とします。大変にありがとうございました。